

國學院大學学術情報リポジトリ

佐賀藩蘭学者の研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西留, いずみ, Nishidome, Izumi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002483

本研究では近世後期から幕末期にかけて日本で最も蘭学が盛んであった佐賀藩において、それを展開する主役であったにも関わらず、これまで明らかとなっていなかった蘭学者たち個々の知識形成の在り方を検討した。一人の人間が身分制社会の中で全く新奇な学問とどのように関わっていったのかということを一史料を出来得る限り使用して考察した。為政者の側からの視点ではなく個人の側からの視点で血の通った身体を持つ一人の人間である蘭学者たちがいかに知識形成を行い、どのように藩政の場面に登場していったかということ学習者にとっての「蘭学」の意義を考慮しつつ検討した。

考察対象は主に職人出身と言われる佐賀藩の藩医であり蘭学者の金武良哲であるが、彼の蘭学の師であった佐賀藩蘭学の始祖島本良順、同じく師である象先堂塾主伊東玄朴についても知識形成の過程、学問の在り方、藩での役割等について合わせて分析・考察した。

第一章「佐賀藩蘭学者島本良順の学問」は佐賀藩蘭学の始祖と言われながら史料的制約から研究が為されてこなかった島本良順の知識形成を中心とした考察である。佐賀県立博物館寄託「金武良哲資料」や、島本に関してこれまで使用されることがほぼなかった佐賀藩大配分である白石鍋島家の史料『御記録』、『日記』を全体的に精査し、以前の成果と総合してこれまで不明であった知識形成の過程を明らかにした。その結果、彼の蘭学が医学以上に言語学に優れ、佐賀藩の蘭学に対してはそれによる貢献が大きかったことを論証した。白石家の史料からは島本が当時としては自由な言動を藩に対して行っており、専門的知識を持った蘭学者に対する藩政府の敬意と寛容な態度、それを享受している蘭学者自身の姿がそこからみてとれた。

第二章「象先堂開塾前後の伊東玄朴―改名とシーボルト事件を中心に」は佐賀藩蘭学者であり江戸在住にして十代藩主鍋島直正の侍医、かつ象先堂塾主でもあった伊東玄朴の文政期における動向を考察した。当該期、玄朴が名乗っていた瀧野姓については、これまでその由来が明らかとなっていなかったが、文政期に白石鍋島家の藩医であった瀧野文礼の養子となっていたことが史料上、判明した。その後、玄朴はシーボルト事件に関係し、幕府の追求から逃れるために今度は瀧野文礼との養子縁組を解消して佐賀藩藩医家の上村春庵の従者として江戸へたったことも明らかとなった。玄朴は当時からその蘭学の能力を佐賀藩に買われ、守られた。それを礎として玄朴は蘭学者としての階段を駆け上り、その地位を不動のものとし、今度は佐賀藩蘭学興隆に一役も二役もかうことになる。

第三章「佐賀藩蘭学者「金武良哲資料」の史料学的研究」では、まず佐賀県立博物館に寄託されている金武良哲の蔵書と訳稿を整理して目録を作成することを第一目的とし、それを分析し金武の学問の特徴を分析、考察することを試みた。出自ゆえに漢学をほぼ学ばずに蘭学者となった金武の蔵書には漢訳洋書が存在せず、蘭書から直接学んだ形跡が窺える。蔵書中には師

である島本良順訳述の種痘に関する稿本や象先堂時代の文法書、オランダ語で書かれた外科書の写本、赤線で多数直しが入った苦勞の跡が見える兵学書の訳稿などが存在し金武の理系を中心とした多分野に亘る知識形成が見えてくる。それに加えて写本中にはオランダ人を描いたと思われるユーモアあふれる落書きや謎かけのような一文、本筋とは関係のない『蘭学階梯』の一節が抜書きされているなど、金武が新しい学問を楽しんで学んでいる形跡が垣間見えた。一方、象先堂修業時代つけていた日記の表紙には長崎御番に関する一文が書かれており、蘭学者としての決意表明とも受け取れた。典拠は不明ながら銅職人の家に生まれ、学問で侍となると宣言したと言われている金武の翻訳は漢文学習の経験不足からか、意味は正確だが文章が生硬で読みにくい傾向がある。一方で数学・物理学・化学等理化学系の訳稿が多く、教科書として使用するために自身が訳した数学の訳稿、独自に作成したと思われる教科書なども多数あり、理系に秀でた蘭学者として藩で重用されていたことが了解される。金武の刊行された唯一の著作『解剖辞書』は解剖用語を和蘭語、ラテン語、日本語の三言語で書き著した明治八（一八七五）年発刊の辞書で、オランダ医学からドイツ医学に変わったことにより後進たちが困らないように刊行されており、蘭学寮、医学寮で教鞭をとった金武の蘭学者であると同時に教育者であった姿勢がうかがわれる。

第四章「天保期における伊東玄朴塾「象先堂」の蘭学修業—佐賀藩蘭学者金武良哲「江戸日記」の分析」では金武が佐賀から江戸の象先堂に遊学した際につけていた修業日記を元に、金武の知識形成、初期象先堂の教授方法等を分析・考察し、当時の遊学者の姿を具体的に明らかにすることを目指した。金武は象先堂で玄朴を補佐し代診を行うことによって实际的に臨床を学ぶ一方で、象先堂のみならず、玄朴の盟友大槻俊斎の元でも会読に参加し和蘭語文法や地理学を学んでいる。それは他の門人たちも同様であり、師のネットワークによって所属する塾以外でも自由に学べる形態が存在したことを示唆している。その他にもシーボルト門人時代から玄朴の知己である戸塚静海の手術を見学したり、蕃書和解御用の箕作阮甫に当時は貴重品であった和蘭語のゾーフ辞書を借り出し写本を作ったりと、玄朴の蘭学ネットワークを最大限に活用しながら実りある修業を行うことが出来ている。開塾後十年に満たない天保期における象先堂の実情、教授内容に関しては不明な点が多かったため金武良哲の「江戸日記」は貴重な史料であり、それによって具体的な様相を垣間見ることができた。

第五章「佐賀藩における蘭学寮・医学寮の創設及び変遷の再検討」では金武良哲資料や白石鍋島家の史料に加えて、『草場珮川日記』『褒賞禄』『旧藩学校調』など、これまであまり言及されることのなかった史料から蘭学寮創設時期や医学寮の変遷等について多角的に再検討を行った。蘭学寮創設時期に関しては生馬寛信氏が白石鍋島家の史料を元に天保十四（一八四三）年に創設されたと指摘していたが、教育史的な立場であったため蘭学研究史上ではこれまで看

過されてきた。それを今回、裏付けることが出来たと考える。医学寮・蘭学寮の変遷について前述の史料を使用して誤認を正したと同時に、金武良哲が弘化期、蘭学寮頭取を務めていたこと、寮生の取りたてに心を砕いていた状況なども見る事ができた。寮頭は開寮時は島本良順、次いで大石良英、金武良哲と続いたことも明らかとなった。蘭学を学ぶ者たちの知識形成の拠点である蘭学寮・医学寮の創立・変遷について明らかにすることは蘭学者の知識形成を検討する上での基礎的研究となったと考える。

補論一「安政期における水銀山再興に関する佐賀藩・平戸藩蘭学者の折衝」では、佐賀藩の藩医である蘭学者大庭雪斎が平戸藩藩医岡口等傳と相神浦水銀山再興について折衝を行っている状況を、佐賀県立図書館蔵千住家文書にのこされた書状から分析した。両蘭学者は夫々の藩主、隠居した前藩主の意向を受けて行動しており、蘭学者のネットワークが政治的に活用されている興味深い例であると考え。嘉永期の水銀山の稼働中止の原因がこれまで不明であったが、水銀の枯渇であったことも史料から判明した。

補論二「『増補再版格物致知略説』訳出をめぐる金武良哲と久米邦武」は高田誠二氏が久米邦武美術館所蔵の久米や金武の自筆稿を元に平成八（一九九六）年に出した「久米邦武と金武良哲の物理学手稿」に関連して書いた論稿である。高田氏は同論文で書誌的なことも含め詳細に分析し科学技術史としての成果と言えるが、同氏は久米邦武研究の第一人者であるため、久米邦武を主体として考察した論稿であった。筆者は金武良哲資料を整理する過程で当時、高田氏が未発見とした金武の自筆訳稿を見出したため、今回それを加えて久米邦武という儒教に造詣の深い歴史学者と金武良哲という生粋の蘭学者の共同作業を再検討した。その中で久米の修文稿が同人の著作である『米欧回覧実記』と時を同じくして書かれていることが推測され、それぞれに影響し合っていることを指摘した。

以上が各章の要旨であるが、これまで史料的制約から通説でとどまっていた蘭学者たちの姿を多少なりとも明らかにすることができたのではないかと考える。

「蘭学」の定義には狭義と広義があり、狭義の蘭学は「直接蘭書の前典に基づく西洋学術の研究」であり、この場合蘭学者の基本条件として蘭語の読解力が必要である。広義の蘭学は「蘭学系知識のほか、中国から伝来した宣教師の編著ないし、漢訳書等による蛮学系の知識をも合わせて、これを西洋学術の総称とする」であり、和蘭語の読解は必要とされないことになっている。今回、佐賀藩の蘭学者たちの知識形成を考察し、和蘭語の文法、読解力を土台として医学、物理学、化学、天文学、兵学を学ぶことこそが蘭学であり、それを実践する者が蘭学者であるという感を強くした。和蘭語の読解を必要としない広義の蘭学は蘭学とは呼べないと筆者は考えている。蘭学という新しい学問から広がる新しい思想、世界観、それをより深く摂取するために志ある蘭学者たちは和蘭語を学んだ。つまり蘭学の土台を為したのは医学というより

むしろ言語学であったと考える方が現実に近いのではなかろうか。

その見地に立った上で本研究に登場した蘭学者たちにとって蘭学を学ぶ動機づけは何であったか。蘭学を学ぼうとする者はまず和蘭語を学習した。それは彼らが自分自身の力で西洋の様々な学問を摂取するための道具、武器となる。武士階級でない者は自分たちの武器を得るために和蘭語を学び、それによって身分、階級を超えてそれまで日本社会になかった思想、方法論を学ぶことができた。蘭学は実学であると言われるがそれは蘭学の成果を享受し活用する為政者側からの見方ではないだろうか。蘭学者たちにとっては実際に役に立つ学問そのものと言うよりは、これまで未知であった体系的かつ壮大な西洋の学問の入り口であり、「新しい学問」そのものであったのである。知的好奇心を躍動させ、学べば学ぶほど新しい発見のある、打込むべき甲斐のある学問であった。史料を通して筆者には為政者側の意図とは別に蘭学という西洋伝来の新しい学問を純粋に楽しんでいる蘭学者たちの姿が見えた。大槻玄沢が『蘭訳梯航』で述べたところの「唯自ラ好ム所ヨリ為ス所ノ私学」である。蘭学者にとっての和蘭語は武器でもある一方、未来への希望でもあっただろう。彼らの生きた人間としての志向性、知的好奇心が蘭学を推進する大きな原動力となったことを過小評価してはいけない。彼らの培った知識はそれによって身分を超えることのできる武器でもあったが、見たこともない言語で蘭書から学ぶ、想像を絶するその困難さを史料上、目の当たりにする時、彼らの動機づけの源は学びに対する純粋な情熱と好奇心にあったのではないかと実感される。